

船曳網の漁況経過と春シラス漁の見通し

(1) 船曳網の漁況経過について

現在の船曳網の漁模様は、北部海域ではコウナゴ、南部海域ではシラスが連日水揚げされています。

コウナゴは、例年より遅めの4月1日に大津で県内初水揚げがありました。その後も漁場は北部海域に限定され、漁模様は低調に推移しています(図1)。

一方シラスは、船曳網解禁直後の2月は、暖水波及の影響により平年を上回る水揚げとなりました。その後4月に入り再び南部海域を中心に漁獲量が増えています。図2に、4月24日のNOAA人工衛星水温画像を示しました。本県沿岸域の海況は、南部を中心に黒潮から波及した暖水に覆われており、この影響によりシラスが来遊したと考えられます。ただし、シラスはマシラス(マイワシ)主体であり、例年主体となるカタクチシラスは1割程度です。マシラスは平成25年頃から混獲がみられるようになりましたが、主体となった年は近年記録にありません。水産試験場では今後の動向に注目しています。

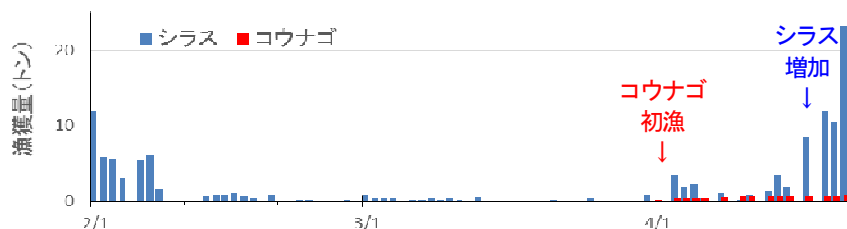


図1：日別船曳網漁獲量の推移

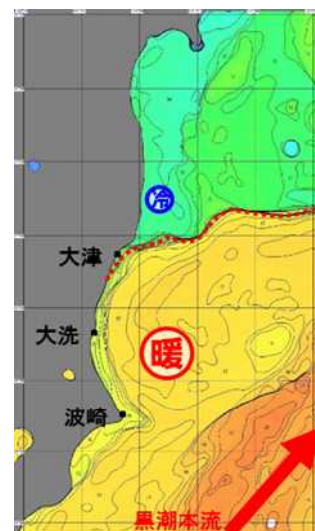


図2：NOAA水温画像(4/24)

(2) 春シラス漁の見通しについて

①海況の見通し

本県沖の今後1ヶ月の水温は「平年並み～やや高め」で推移すると予測されています(「水産の窓29年-No.3」参照)。また、海況予測システムFRA-ROMS(国立研究開発法人水産研究・教育機構-中央水産研究所提供)によると、今後も引き続き本県沿岸域に暖水が波及しますが、5月下旬には弱まると考えられます。

②カタクチイワシ親魚の資源状況・卵の分布状況

例年漁獲の主体となるカタクチシラスの産卵親魚(大型のカタクチイワシ)は、茨城・千葉の漁獲状況から今年も低水準と考えられます。また、4月上旬に茨城沖(会瀬～犬吠埼)で実施した海洋観測調査では、カタクチイワシ卵は少なく(図3)、マイワシの卵稚仔が多くみられました。

【まとめ】

今後本県沿岸域には引き続き暖水が波及すると予測されていることから、今後さらに北部海域へもシラス漁場が広がると考えられます。しかし、マイワシの産卵期(5月頃まで)を考慮するとマシラスが漁獲される時期は6月頃までであること、現時点のカタクチシラス及び本県周辺のカタクチイワシ資源、卵分布量は低水準であること、また暖水波及が弱まる5月下旬には漁況が低下すると考えられることから、今年の春シラス漁獲水準は「中漁(300～1,000ト)」と予測されます。

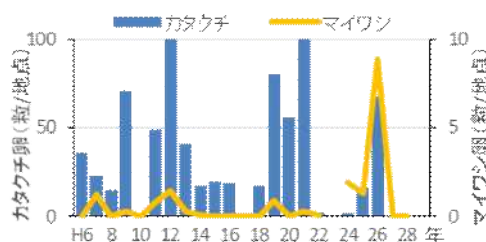


図3：4月の海洋観測調査における茨城沖卵採集量

(参考) 全国のシラス動向について

築地のシラス干し製品の入荷動向をみると、今年は水揚げが散発的で、主産地の春漁の本格化に遅れがみられているようです。また、全国的にもシラスはマシラス主体となっています。

(回遊性資源部 柴口 怜佳)

「 [次号予告] H29.5.2の「水産の窓」は、「旨味成分から見たカナガシラの旬」を予定しています。 」